

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 『山鹿語類』 聖學篇の成立と『性理大全』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 王, 起 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000891">https://doi.org/10.57529/00000891</a>

# 『山鹿語類』 聖學篇の成立と 『性理大全』

王 起

## はじめに

山鹿素行（一六二二—一六八五）は江戸前期の有名な兵学者である。明治維新後、学者は山鹿素行が遺した多くの著述をもって、兵学面では士道の祖という地位を山鹿素行に賦与したのみならず、儒学面では古学の先駆者、そして民族主義者・天皇国体論者・経済道義の提唱者などの枠組みから、多数の山鹿素行に関する研究成果を発表してきた。しかし、戦後は一転して、江戸時代から敗戦前まで士道の祖や国体論者として持て囃された山鹿素行に学ぼうとする傾向が急激に冷却し、主に山鹿素行の儒学思想の面から取り扱う研究が主流になっている。例えば、丸山真男氏は『日本政治思想史研究』の中で、朱子学が近代化を妨げる封建イデオロギとして扱い、反朱子学の日本古学派を朱子学の

解体和考えて、古学には近代的な要素を孕んでいるという観点を提唱し、一世を風靡した。古学派の先駆者としての山鹿素行の古学思想は、伊藤仁斎や荻生徂徠のものと比べて朱子学に近いものとされたが、朱子学より近代的な思想であるとも考えられていた。尾藤正英氏、田原嗣郎氏などは、その後、丸山の理論に反論し、幾つかの山鹿素行に関する論文を発表したが、近代的な視角から日中二元対立の立場に立って山鹿素行の古学思想を研究する枠から脱していないとも言えるのであろう。<sup>①</sup>

近年、日本古学派を東アジアの視野において、当時の状況に即してそれを再認識しようとする主張する学者が続出してきた。<sup>②</sup>それ以前の傾向であった日本古学を朱子学と切り離して一方的にその違いを検討することの偏りを正し、東アジア文化という基盤に立てば、日本古学派の成立背景にあ

るのは朱子学のみならず、より複雑な基盤があり、それを直視すべきであるという主調は首肯すべきであろう。山鹿素行の場合にも、その古学思想を客観的に認識するために、彼が学んできた儒学の全体像、特に朱子学の実像、すなわちその学問の基盤をより明らかにすることがその第一歩であると思われる。

そこで本稿では、『山鹿語類』を対象に論考を進める。何故ならば、『山鹿語類』は山鹿素行の一番重要な古学代表作だと言えるからである。その古学理論は主に「聖學篇」に含まれている。この「聖學篇」に「山鹿語類聖學篇序」があって、『山鹿語類』の他の部分と違って独立した一部と見なすことができる。<sup>(4)</sup> 聖學篇の成立を考察することによって、山鹿素行の古学思想の基盤、そして彼が認識した朱子学とは何かという問題を明らかにすることができよう。本稿は聖學篇の目録と内容の引用語の典故を検討し、その成立が明の『性理大全』と如何なる具体的な関係があるかということを考察したい。すなわち、その見通しを示せば、山鹿素行が反対した朱子学とは狭義的な「朱熹の学」ではなく、「明の朱子学」ではないかという疑義の解明である。

本稿に使用した『山鹿語類』の刊本は、国書刊行会本で

あり、『性理大全』は康熙十二年（一六七三）で、内府が明板を修復し、刊行した版本である。

## 一 『山鹿語類』聖學篇及び『性理大全』の流布

「山鹿語類序」には「癸卯（寛文三年、一六六三）先生之學日新、而直以聖人為證。故漢唐宋明之諸儒、其誥詰事論、各可執用、而至其聖學之的意、悉乖戾先生之志。冬十一月門人等輯錄先生之語類、其書皆因先儒之言以糾其道、乙巳（寛文五年、一六六五）書成」という記事によれば、『山鹿語類』の成書経緯がわかる。すなわち、本書は山鹿素行の門人たちが山鹿素行の先儒を批判した議論を集成したもので、その本旨は古聖人の道に復帰することにあった。この『山鹿語類』の編纂は計二年余を費やしている。<sup>(5)</sup>

『山鹿語類』は計四五巻で、正編（卷一―四三）と続編（『枕塊記』、卷四四―四五）に分かれる。内容の違いによって、正編の中で卷（一一―三二）と卷（三三―四三）という二つの部分に分かれる。前者は和文で、人倫五常そして武士としての道を説いたものである。後者は聖學篇で、漢文で書かれたもので、天地万物の理を明らかにすることで、前者

において説いた道を磐石とするための理論を固めたのである。「山鹿語類聖學篇序」には「先生嘗與門人小子、謂聖學之要、論辯諸儒之惑。門人等間竊輯錄其辭、述聖學篇」という言葉がある。筆者の見解では、この「聖學之要」は聖學篇の前三卷（卷三三―三五）であり、「論辯諸儒之惑」は聖學篇の後八卷（卷三六―四三）であると判断できる。この序から、山鹿素行は門人たちに「聖學之要」と「論辯諸儒之惑」を教授した際、手元にあったテキストから「諸儒」の言葉を引用し、また批判した状況を彷彿とさせる。では、そのテキストは何か。山鹿素行は手に入れた書籍には、その可能性がもっと高いのは『性理大全』と推測される。

明の永楽十二（一四一四）年、明成祖の勅命によって胡広や金幼孜などの学者が、九ヶ月をかけ永楽十三年に『御製五經四書性理大全』という膨大な著述を編纂した。『性理大全』は『御製五經四書性理大全』の一部である。『性理大全』は全書七〇卷あり、九篇の程朱理学の著作及び百二十余りの理学者の性理に関する文章や議論が含まれている。その卷（一一―二五）には周敦頤『太極圖』・『通書』、張載『西銘』、邵雍『皇極經世書』、朱熹『易學啓蒙』・『家禮』、蔡元定『律呂新書』、蔡沈『洪範皇極經世内篇』がある。卷（二六―七〇）は理学者たちが理学を論述した内

容や批評を収録したもので、理学（卷二六―二七）・鬼神（卷二八）・性理（卷二九―三七）・道統聖賢（卷三八）・諸儒（卷三九―四二）・學（卷四三―五六）・諸子（卷五七―五八）・歷代（卷五九―六四）・君道（卷六五）・治道（卷六六―六九）・詩文賦（卷七〇）、計十三のテーマに分けられ、一三〇余の目録を含んでいる。先行研究によれば、胡広などの学者が『性理大全』卷（一一―二五）を編纂した時、『朱子大伝』を参考したのであり、また卷（二六―七〇）を編纂した時には、『朱子語類』を大いに参考したのである。<sup>9)</sup>

程朱理学の道統の綱要としての『性理大全』は、明から清に至るまで長い間に知識人の読書や学問、加えて実践などの面に大きな役割を果たしている。<sup>10)</sup>それに止まらず、朝鮮やベトナムや日本においても大きな影響を及ぼした。<sup>11)</sup>管見の限り、今日まで『性理大全』の江戸時代における様相に関する研究成果はまだ出ていないようである。

ここで、『性理大全』の江戸時代における流布状況に関して一言したい。華国学氏はその論文の中で、入明留学僧の桂庵玄樹（一四二七―一五〇八）は「学を成した後、長州の永福寺に帰り、更に朱子学を崇信し、『四書輯釈』（倪士毅）や『四書大全』などの書を読み、深く聖学の精微を究めた。後使節として明に来て、それを契機により、いつ

そう宋の儒学者の新注釈書や著作に研鑽し、もつとも朱子学に力を集中した<sup>12)</sup>と論じた。桂庵玄樹は使節として入明したのは一四六七年であり、もし華氏の指摘に確実な根拠があれば、『四書大全』は一四六七年以前、すでに日本に流布したことになる。『四書大全』と併称される『性理大全』は、ここに記録されなかったとしても、すでに日本に伝来したのではないか。すなわち、『性理大全』は十五世紀に日本に将来された可能性が非常に高いことである。

『性理大全』は江戸前期にはすでに流行を見ていた。『倭板書籍考』の「性理大全」条には「七十卷アリ、補注本ナリ。永樂天子敕修三大全ノ一ナリ、編者四書大全二同ジ、点者熊谷立設第(弟)子小出永安ナリ」という記録がある。この補注本は明の万曆十三(一六〇三)年に刊行された『新刻九我李太史校正性理大全』で、承応二(一六五三)年に刊行されたこの『性理大全』は、日本で初めて出版されたものである。そして、一六八五年に刊行された『広益書籍目録』は当時の市場で商品として流通した書物を記録した書籍で、その中には『性理大全』もある<sup>13)</sup>。以上列挙した二つの明証は『性理大全』が江戸時代ですでに刊行され、しかも商品として広く流布したという事実を示す。

しかし、中国や朝鮮やベトナムなどの場合と異なり、徳

川幕府は朱子学に代表される儒学を積極的に導入したとしても、上述した国々のように科挙制は実施しなかった。したがって、『性理大全』そして他の儒学書の流行範囲はやはり漢学に興味を持つ一部ある余裕の人びとに限定される。しかし、当時最新の大徳の儒学の全貌を理解しようとする江戸の学者にとって、程朱理学の一大集成としての『性理大全』は有益で、利便性の高い指要であったことは疑問の余地はない。

山鹿素行の著述には、初めて『性理大全』が明記されたのは『修教要録』(三十五歳)である。これは山鹿素行が宋明儒学を中心に修学した時期で、儒書中から学者の言論を抄出し、自分の見解も加えてきたものである。『修教要録』の巻一の割注の中に「朱子解出性理大全」という言葉がある。すなわち、収録された朱子の言論は『朱子語類』や『朱子文集』などの朱熹自身の著述から引用したものでなく、まさしく『性理大全』から引用したと言えよう。佐久間正氏は「本書(『修教要録』)に引用された『四書集注』・『四書或問』・『朱子文集』・『朱子語類』等に由来する朱熹の言葉は、実は朱子学のいわば二次書ともいえる『性理大全』などに拠っているのである<sup>14)</sup>」と指摘する。

一二〇余家の理学者の言論を収録した『性理大全』は、素

行にとつても便宜ある素材であるに違いない。例えば山崎闇斎は、宋代朱子学と明代朱子学に明らかな違いがあると知っていた<sup>1)</sup>。しかし、素行は、多くの儒学者たちと同様に流布本の『性理大全』から学ぶため、その相違を認識していなかった。つまり、明の朱子学は、真の朱子学というべき宋の朱子学とは違うのだと、弁別してはいなかった。

当時のあらゆる学説に対して疑瞞を感じていたため、その後、終に素行自身が古学をもつて自分の実学思想を確立していく。つまり、素行は、宋代朱子学ではなく明代朱子学の視点から、漢・唐以来の学者を批判するとともに、自己の実学思想へと発展する。本稿の主旨は以上のようにであるが、以下は筆者が聖学篇を「聖学之要」(卷三三―三三五)と「理学批判」(卷三三―三四三)とに分けて、各引用状況や目録の比較を検討することによって、『性理大全』との密接な関わり中で論じていきたい。

## 二 「聖学之要」(卷三三―三三五)について

聖学篇の「聖学一」・「聖学二」・「聖学三」は『山鹿語類』の卷三三・卷三四・卷三五に当たる。山鹿素行は三巻のテーマを全て「致知」という名を冠して、主に聖学の理論内容

を論述したのである。さらに詳細に分析すると、それぞれの重点や特徴が見える。次にその細かな目録を上げよう。

### 卷三三 聖学一

- 一 聖人
- 二 辨或問聖人之説
- 三 論格物致知附 涵養 持敬 存心
- 四 辨或問格物致知之説附 涵養 持敬 主靜 存心
- 五 論義利(論人必有情欲、論不可令欲充之)
- 六 論義利附君子小人 王伯 出處
- 七 辨或問義利之説
- 八 論異端(総論異端、論異端之教違聖学、論攻伐異端)
- 九 論力行克己復禮
- 一〇 論省察改過

卷三三は主に「聖学」の「聖」の意味を説明するのである。古聖人の学を唱導し、そして彼の門人たちからは、孔聖人の「垂迹」として信奉された山鹿素行は、情欲を人間の自然の本性とする立場に立ち、聖人を称賛しながらも、聖人は普通の人間と区別がなく、また情欲もあり、しかも普通

の人間より、それは多量であると主張するのである。これは宋明理学の聖人觀との大きな違いである。

方法論としても、山鹿素行は宋明儒学者のように『大學』八条目の「格物致知」を重視はしたが、独自の見解を立てる。彼は自分の理解をもって、宋明儒者の「格物致知」に対する解釈や「涵養」・「持敬」・「主靜」などの理学工夫に対する見解は全て批判した。加えて現実の立場に立つて、君子と小人との違いは全て「義」・「利」の二点にあると主張した。山鹿素行は積極的に人間の情欲を肯定するため、宋明理学の「天理を存し、人欲を滅す」という理論に強く反対し、人欲は人間の自然的なもの、取り除けないもの、しかも取り除くべきでもないものであると考えていた。それで、聖学を実践しようとする人が工夫できるのは、欲を消滅するのではなく、その膨張を抑制することにあつた。すなわち、「不可令欲充之」である。山鹿素行はそれを出発点として、「利害の好悪は人々皆然り」、「義利相因つて其の跡竟に千里の差あり」、「君子小人の間全く義と利に在り」、君子の利は「遠くして大なり」、小人の利は「近くして小なり」と繰り返すのである。<sup>(18)</sup> 聖学の主張を論じた後、彼はまた道統論をもって、聖学と異なる「異端」の一章を設けて取返して論じた。素行は聖学とは「日用の學のみ」であり、それ

は人間にとつて簡便で理解も容易であるが、世に実践するのはもつとも難しいと論ずるのである。また、彼は「力行」と「省察」という二章を設置した。

### 卷三四 聖學二

一 爲學（致人所以爲學、學之解、論古聖賢各以學、學在立志、學法、學問、學習、學思、學蔽、辨或問學之說）

二 師教（論師之說、師字解、立師、師友）、立教（論教之說、教人、教法）

三 讀書（総論讀書（讀書、在讀聖人之書、讀書法、辨或問讀書之說）、經書（讀易「原易 原卦 原圖書 原著策」）、讀書、讀詩、讀春秋、讀禮附六經 六經注釈、讀論語、讀大學、讀中庸、讀孟子附四書注釈）

卷三四は「聖學」の「學」に関する内容を説明することを中心とする。まずは、人間にとつて学の必要性、その意義、聖学を学ぶ方法を説明するのである。そして、武士を四民の師として扱い、生涯に武士にその覚悟と資格を教え込もうとする山鹿素行は「師」の角度から、師としての資



格は何か、そして人に教える方法も論じたのである。最後、山鹿素行は書籍を読むのが聖学を理解するにはとても重要な道であると思っていた。もちろん学者が読むべき本は聖門の經典である。山鹿素行は經典とは何か、經典をどう読むべきかということを詳細に説明した。

### 卷三五 聖學三

一 雜子 儒家者流 荀子、賈誼、董子、揚子、劉向、

孔叢子、文中子、周子（通書）、張子（正蒙、西銘）、二程子、邵子（皇極經世書）、

李子、朱子、程朱門人張拭、呂祖謙、蔡

季通、蔡仲默、元明儒子、論道統之說、論

崇儒師

道家者流 老子、莊子（列子）、鶡冠子

法家者流 管子、商子、慎子、韓子、附名

家者流（尹文子）、墨家者流（墨子、晏子）、

縱橫家者流（鬼谷子）、雜家者流

兵家者流

二 史類 總論史、史記、西漢書、後漢書、三國志、隋

書、資治通鑑、通鑑綱目、唐鑑、綱鑑、論本

朝史、東鑑、論史法、論讀史之法、論大一統  
正統、論史學爲格致

### 三 論詩

### 四 論文

一見してわかるように、卷三五はもはや「聖學」ではない。山鹿素行がこのような内容をここに設けた原因は、聖門の学者は經典を読むべきほか、「小道」としての異端をも知らなければならぬと考えていたのである。すなわち、それも「致知」すべきものである。漢代以後の儒家、そして道家・法家・名家・墨家・縱橫家・雜家などの「雜子」は全部異端であるとしても、なんの価値もないとは言えないのである。逆に、聖学を実生活に実践するのに役に立てると考えていたのである。また、聖学を理解するためには、歴史も研究すべき内容である。山鹿素行は中国の重要な史書を簡単に紹介した後、日本の歴史も触れて論じたことがある。素行は詩と文そのものは聖学に害悪がなく、排斥すべきものではないと思っていた。しかし、当時の多くの知識人はやはり詩や文を作ることには耽溺したことを警戒し、詩と文とにやや厳しい立場を取ったのである。



卷三三や卷三四の内容と比べてみれば、卷三五は主に知識人や史書などのまとめとして紹介に過ぎないのである。もちろん、こうした部分の多くは、他の書籍から引用すると推測できる。山鹿素行の閲読書目を考察してみると、この巻の内容と類似したものは『朱子語類』（卷九四―一二六）と『性理大全』（卷三九―四二）と『文獻通考』經籍考（經籍卷三五―四一、卷一八―二〇、卷四八）がある。<sup>19)</sup>

三書の内容を照らして比べることによって、卷三五はやはり『性理大全』と『文獻通考』を参考にしたことが明らかである。具体的に言うと、「雜子」と「史類」は主に『文獻通考』を参考とし、「論詩」と「論文」は『性理大全』を参考にしたのである。

まずは、『文獻通考』との関係性を示す具体的な証拠を三つあげよう。

(一) 卷三五で「漢藝文志」という語が出現した回数は「儒家者流」に一条、「道家者流」に一条、「名家者流」に一条、「兵家者流」に一条、「漢志」と言う言葉が出現したのは「縦横家者流」に一条、「雜家」に一条、「經籍志」と言う言葉が出現したのは「儒家者流」に一条、「道家者流」に一条、「史類」に一条、その他、『文獻通考』の著者馬端臨と言う

名前も三回も見出せるのである。この巻で出現した「漢藝文志」や「漢志」や「經籍志」などの内容は、全て『文獻通考』經籍考に見える。しかも、『朱子語類』や『性理大全』には見えないのである。

(二) 目録の構成から見れば、『文獻通考』經籍考の經籍卷（經籍卷三五―四一）は「子類」が儒家（經籍卷三五―三七）、道家（經籍卷三八）、法家・名家・墨家・縦横家（經籍卷三九）、雜家（經籍卷四〇）に分けている。兵家は『文獻通考』經籍考の經籍卷四八に属している。『山鹿語類』の卷三五は明らかにその目録を模倣したのである。

(三) 卷三五の「儒家流」の荀子から邵子（皇極經世書）までの部分は、人物の著述を中心として描写して、のちの部分とは異なっている。この部分を『文獻通考』（經籍卷三五―三七）と比較対照してみると、『文獻通考』を参照したことがわかる。そして、卷三五の「史類」の史記から唐鑑までの部分は、『文獻通考』の相関の内容と相関性あり、しかも順序も一致している。具体的にいえば、「史類」が参考にしたのは『文獻通考』經籍考の經籍（卷二〇―二七）、主に經籍卷二〇である。

次に、『性理大全』との相関性を示す証拠を二つがあげよう。

(一) 卷三五の「論詩」の引用については、朱子一条、西山真氏一条、程子二条、臨川呉氏一条がある。それらは全部『性理大全』の「論詩」に見える。卷三五の「論文」の引用については、和靖尹氏一条、程子二条、朱子四条がある。それらも『性理大全』の「論文」に発見できる。

(二) 上述したように、卷三五の「儒家流」は二つの部分に分けることができる。のちの部分、すなわち李子から最後までまでの部分の内容が多く議論で、著作を中心に論述するそれ以前の部分と全く異なっている。この部分の叙述形式は『性理大全』卷(四一—四二)と同様である。

以上の分析から考察すると、「聖學之要」(卷三三—三五)では、『文献通考』が中心的な参考文献であり、『性理大全』はそれを補う素材として扱われていたと看取できる。

### 三 「理学批判」(卷三六—四三)について

聖學篇では、「聖學之要」を叙述し終わった後、朱子学を中心とした宋明理学という「異端」に対する批判の論述を始めた。すなわち、「聖學三」(卷三六)から「聖學十一」(卷四三)までの部分である。山鹿素行の古学思想

の内容及び特色を検討するには、この部分が一番重要な参考資料だと言えるであろう。一般に山鹿素行の古学研究では、研究者はこの中にある朱子学批判の語を吟味して、朱子の著作よりではなく、いわゆる朱子学と比較して山鹿素行の古学思想を検討するのである。しかし、より確実に言えば、素行の朱子学は朱子本人の学問とはやや異なり、明の朱子学と言わなければならない。その証拠の一つは、この部分で検討すべき参考テキストは『朱子語類』ではなく、『性理大全』である。

この部分で山鹿素行が参考にしたのは『性理大全』卷(二六—三七)である。前にも触れたように、『性理大全』の後半四五卷は『朱子語類』を参考としている。しかも、山鹿素行が『山鹿語類』を著述した時点で、『朱子語類』を読んだ可能性がないとは言い切れないのである。<sup>20)</sup>したがって、この部分の参考テキストが『性理大全』であると証明するためには、その参考テキストが『朱子語類』でないことも合わせて証明しなければならないことになる。以上の三者、すなわち『朱子語類』、『性理大全』と『山鹿語類』の関係について、図一で三書も目録をあげよう。

図一：『山鹿語類・聖學篇』と『朱子語類』、『性理大全』との目録（部分）対照表

<p>性理</p>	<p>『朱子語類』 卷一 理氣上 卷二 理氣下</p>	<p>『性理大全』 卷二六 理氣一（総論、太極、天地、天度曆法附） 卷二七 理氣二（天文、陰陽、五行、時令、地理潮汐附）</p>
<p>鬼神</p>	<p>卷三 鬼神 卷二八 鬼神（総論、論人鬼神兼精神魂魄、論祭祀祖考神祇、論祭祀神祇、論生死）</p>	<p>『山鹿語類・聖學篇』 聖學一 大原（論道之大原、論古聖各稱天地、論或問大原之說、論易有太極、辨或問太極之說、辨諸儒太極之說、論一物一太極之說、論濂溪無極之說、論或問無極之說、論諸說無極、論理氣妙合而人物生之說、論周子太極圖說主靜之說、辨或問主靜之說） 聖學八 天地（総論天地、天、地、辨或問天地之說、辨或問天、辨或問地、天文、辨或問天文、天度、辨或問天度、曆數、辨或問歷數、地理、辨或問地理） 聖學六（論鬼神之說、論鬼神魂魄、論祭祀祖考、論祭祀神祇、辨或問鬼神魂魄祭祀神祇之說） 聖學九 性心（論天命之謂性、辨或問性之說、論孟子性善之說、辨或問性善之說、論天命之性氣質之性、辨或問天命之性氣質之性、論諸子說性、論人物之性、辨或問人物之性） 聖學十 性心（論心、辨或問心之說、論心之応用、辨或問心之応用、論性心之差異、論意、論情、辨或問意之說、辨或問情之說、論志氣、論思慮） 聖學五 仁義五常誠忠信敬（論仁之說、辨或問仁之說、論仁義之說、辨或問仁義之說、論仁義禮智之說、辨或問仁義禮智之說、論誠之說、辨或問誠之說、論忠信之說並忠恕、論恭敬之說並恭、辨或問敬之說） 聖學四 中道理德（論中、辨或問中之說、論道、辨或問道之說、論理、辨或問理之說、論德、辨或問德之說） 聖學七（陰陽、五行）</p>
<p>理氣</p>	<p>卷四 性理一 卷五 性理二 卷六 性理三 卷二九 性理一（性命、性、人物之性） 卷三〇 性理二（氣質之性） 卷三一 性理三（氣質之性、命才附） 卷三二 性理四（心） 卷三三 性理五（心性情、定性 情意 志氣 志意思慮附） 卷三四 性理六（道、理、德） 卷三五 性理七（仁） 卷三六 性理八（仁義、仁義禮智） 卷三七 性理九（仁義禮智信、誠、忠信、忠恕、恭敬）</p>	

理気と鬼神と性理とは朱子学論の三大カテゴリーである。『性理大全』は『朱子語類』の枠組を継承したのみならず、その具体的な細目も多く参照したのである。『性理大全』では多くの理学者の議論を、『朱子語類』の結構と細目にしたがって分類整理し、『朱子語類』よりもその内容は、むしろ豊富である。ただし山鹿素行は古聖人の学へ復帰することを唱導し、朱子学を代表する宋明理学を批判するため、当然朱子学と異なったところがある。聖學篇を他の兩書と比べて見ると、その一番大きな違いは順序の変更である。しかし、本稿は主に三書の関係を論ずることを重心とするため、その具体的な違いや原因は他日論じたい。

山鹿素行は自分が「聖學」に対する理解をもって、自分の「理学」も創出した。彼の「理学」には理気・鬼神・性理という三つの枠組みが含まれている。図で示したように、聖學篇のこの部分と『性理大全』との対応関係は図二で示すように、聖學篇のこの部分は、『性理大全』を参考テキストとしたのは一見して明瞭である。三書の関係によれば、『性理大全』の参考テキストは『朱子語類』であり、『山鹿語類』の参考テキストは『性理大全』であることがわかる。以上の目録を比較することによって、聖學篇のこの部分は『性理大全』を参考にして作り出したものであることを

図二：『山鹿語類・聖學篇』と『性理大全』の目録（部分）対照表

『山鹿語類・聖學篇』	『性理大全』
聖學四	性理六
聖學五	性理七・八・九
聖學六	鬼神（卷一八）
聖學七	理気二（卷二七）
聖學八	理気一の一部分と理気二
聖學九	性理一・二・三
聖學十	性理四・五
聖學十一	理気一の一部分

指摘しておく。そして、『性理大全』は聖學篇のこの部分の成立にはどれほどの意味があるのか。これは、この部分の引用状況を考察することによって、その問題を解明することができると思われる。筆者は聖學篇の聖學五の「辨或問仁之說」という子目を例として、その引用状況を調べた。この子目には、計四五条の引用がある。その四二条の引用（南軒張氏曰二条、程子曰二条、朱子曰二八条、西山真氏曰二条、延平李氏四条、問明道二条、北溪陳淳曰一条、魯齋許氏曰一条）がすべて『性理大全』の「性理七」（仁）という子目から引用したことがわかる。しかも、一条は『性

『理大全』の「性理八」に発見でき、また一条は『性理大全』の巻四に発見できる。『性理大全』に見えないのは、ただ王陽明の言葉の一条のみである。ここから見ると、『性理大全』は聖學篇のこの部分にとって一番重要な参考テキストであるに違いない。

#### 四 むすび

以上、筆者は『山鹿語類』聖學篇を二つの部分に分けて、その成立と『性理大全』との密接な関係を明らかにした。聖學篇は『文献通考』を参考にしたが、やはり明の『性理大全』を中心とする。思想史研究の角度から見れば、山鹿素行が古学的な視点から批判した朱子学は、実は解釈としての明代朱子学であり、朱熹による朱子学そのままではないことは明白である。というのは、『性理大全』は如実に『朱子語類』の中にある朱子の語をそのまま引用するにしても、『性理大全』を介して朱子学に触れた人々は、『朱子語類』の読者とは朱子学について恐らく異なった認識を持つからである。

この点を厳密に検討しなければ、「素行の朱子学に対する批判とは朱子学を内在的に理解せず、一定の自己の見解

を立ててそこから言わば超越的に批判したものである」<sup>(2)</sup>、あるいは山鹿素行が「朱子学的地盤で朱子と争う」<sup>(2)</sup>などの指摘も、それらがたとえ客観的な事実だとしても、著作内容に依拠する正確な思想史的認識とは言い難いのではないか。

それゆえ、近代的な視角から日中二元対立の立場に立つ山鹿素行古学研究であろうと、東アジアという視点からの山鹿素行古学研究を見直そうという立場であろうと、その前提は、まさに小島毅氏の「ある人物の思想を分析するには、その人物がどこからどのような情報を得ていたかを把握しておく必要があるのではないか」<sup>(23)</sup>という部分については、一先ず首肯できる。今後、直近の課題としては、山鹿素行の『四書句讀大全』の『大學』部分と林羅山『大學諺解』、明の鄭維岳『四書知新日録』、王陽明『大學問』などの儒学書との内容関係を検討したい。最後には、彼の古学思想の性質や特徴を再認識したい。

#### 注

(1) 山鹿素行の古学思想に対する具体的な研究状況については、以下の本を参照した。中山広司『山鹿素行の研究』（神道史学会、一九八八年、自序及び二〇九—三〇八ページ）。劉長輝『聖

学」とその展開」(ベリかん社、一九九八年、一六一―二五ページ)。特に丸山真男『日本政治思想史研究』(東京大学出版会、一九五二年)、尾藤正英『日本封建思想史研究―幕藩体制の原理と朱子学的思惟―』(青木書店、一九六一年)、田原嗣郎『徳川思想史研究』(未来社、一九六七年)などの著述は当時の学界に大きな影響を与えた。

(2) 例えば、井上厚史「儒教は「東アジア共同体」の紐帯となりうるか」(北東アジア研究(別冊二)、二〇一三年、九五―一六ページ)。黄俊傑「東アジア思想交流史 中国・日本・台湾を中心として」(藤井倫明等訳、岩波書店、二〇一三年)など。そして土田健次郎『江戸の朱子学』(筑摩書房、二〇一四年)も参照。

(3) 広義に言えば、山鹿素行の古学は中華聖学と日本聖学という二つの段階を含む(堀勇雄、『山鹿素行』、吉川弘文館、一九八七年、三三―ページ)。本論は狭義的な立場を取り、すなわち「中華聖学」という段階を山鹿素行の古学形成期とする。

(4) 『山鹿語類』聖學篇は初めて刊行されたのは一九〇二年である(井上哲次郎等編、『日本倫理集編巻四・古学派之部』、育成会。約一〇年後、『山鹿語類』全書が刊行された(国書刊行会編、『山鹿語類』、岩波書店、一九一〇―一九一一年)。廣瀬豊等一九四一年から一九四二年まで『山鹿素行全集 思想篇』を編

纂し刊行した。その巻四―九は『山鹿語類』を取めたのである。しかも、もともと漢文で書いた聖學篇はそこで古文に翻訳されたのである。そして『山鹿語類(抄)』(田原嗣郎、中央公論社、一九七一年)は、抄録した内容を現代日本語に翻訳した。

(5) 『山鹿語類』巻一、山鹿語類序、二ページ。

(6) 『山鹿語類』の成立の経緯について、また「素行先生年譜」(国民精神文化研究所編、『山鹿素行集』巻一、目黒書店、一九四三年)も参考になる。その二二ページの「寛文三年」条に「十一月、門人等輯録山家語類」(「家」は「鹿」の誤り)という記録あり、そして二三ページの「寛文五年」条に「翌年四月四日、有到百日忌服喪日記枕塊記(附載於山鹿語類)、此年、完成山鹿語類四十三巻」という記録ある。

(7) 『山鹿語類』巻四、山鹿語類聖學篇序、一ページ。

(8) 吾妻重二「性理大全の成立と朱子成書」(名古屋大學中國哲學論集(五)、一―一八ページ、二〇〇六年)参照。またこの論文は同氏著『宋代思想の研究 儒教・道教・仏教を巡る考察』(関西大学出版部、二〇〇九年)に収入。しかし、三浦秀一氏は「これは吾妻氏の創見だと言いたい、実はこういう観点は明代中期の黄佐という人はすでに自分の著述の跋文の中に提出した」と指摘した(同氏、「明末清初時期『性理大全書』的傳播與接受」、貴陽学院学报(社会科学版)、二〇一五年第一期)。すなわち、



明の学者はすでに『性理大全』巻(一一二五)の参考底本が『朱子成書』であるということを指摘した。

- (9) 邱漢生など編『宋明理学史(下)』(人民出版社、一九八七年)一四—一七ページ。そして、曾毓芬「明代官修『大全』散論」(史学史研究、一九九六年五月)も参照。

- (10) 『性理大全』は清代の学者から批判され、長い間にあまり重視されていなかったようである。近年、『性理大全』が思想史の中で持つ重要性は漸く学界に認められてきた。現在、東北大学の三浦秀一氏による『性理大全書』の思想史的研究』は注目すべきと思われる。

- (11) 劉保全「明初『性理大全』的刊行及其在朝鮮的傳播」(朝鮮・韓国歴史研究、二〇一一年一月)、張品端「朱子学在越南的傳播與影響」(泉州師範学院学报、二〇一三年第一期)。

- (12) 中国哲学史学会、浙江省社会科学研究所編「論中国哲学史宋明理学討論會論文集」(浙江人民出版社、二〇一三年)、三九九ページ。

- (13) 長沢規矩也、阿部隆一編『日本書目大成』巻三(汲古書院、一九七九年)、一三ページ。『倭板書籍考』は幸島宗意が編纂したもので、本書の底本は元禄十五(一七〇二)年の「京都木村市郎兵衛刊本」である。具体的には、本書の「倭板書籍考」解題参照。なお、『倭板書籍考』の初版は寛文八(一六六八)年の

ものである。

- (14) 西村市良右衛門など編『広益書籍目録』(全三巻)巻二(一六八五年)、「儒家経書目」七丁。

- (15) 国民精神文化研究所編『山鹿素行集』巻三(目黒書店、一九四三年)一七ページと二三ページ。

- (16) 佐久間正「素行学の特質」、長崎大学教養部紀要(人文科学篇)第二巻第一号(一九八一年七月)七ページ。

- (17) 『山鹿語類』巻四、二五—三〇ページ。

- (18) 『文献通考』は明の馬端臨著。本論文の底本は、中華書局編輯部編『文献通考』(中華書局、一九八四年)。山鹿素行自著の閲読書目「積徳堂書籍目録」には「文献通考拔書」という条がある。

- (19) (廣瀬豊編『山鹿素行全集 思想篇』第一五巻(岩波書店、一九四一年)八三—八四ページ)

- (20) 中山広司著『山鹿素行の研究』の「山鹿素行著述読書等一覽」によると、山鹿素行が寛文七年、八年の条に、『朱子語類』がある。この時、山鹿素行は『山鹿語類』を完成していた。

- (21) 田原嗣郎「徳川思想史研究」(未来社、一九六七年)一七七ページ。

- (22) 相良亨『近世日本における儒教運動の系譜』(理想社、一九七五年)一二四ページ。



(23) 小島毅「思想伝達媒体としての書物 朱子学の文化の歴史学  
序説」、『宋代社会のネットワーク』（宋代史研究会研究集、汲古  
書院、一九九八年）に収入、六八ページ。

〔キーワード〕 山鹿素行、山鹿語類、聖學篇、性理大全、朱子語類